

ユニテ

UNITÉ

4



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
ロラン＝マルヴィエール往復書簡(3)	南大路 振 一訳 … 3
『カイエ＝ロマン・ロラン17』よりロランの手紙	宮 本 正 清訳 … 24
「〈Du holde Kunst in wie viel granden Stunden〉…」	細 川 廣 一 … 31
〈深い出会い〉への望み	下 村 肇 … 35
ロマン・ロランと私	田 中 伸 枝 … 38
『ロマン・ロランと音楽』	ジョルジュ・オーリック … 41
ユニテの広場	45
ロマン・ロラン研究所の近況	49
友の会だより	51
あとがき	54



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

1886—1887年の頃であった、二十歳の私のベシミスムの上に、意志的な、一時的な「^{フレド}信条」によって、無理やりに平和を建てると共に——（生きるためにはそうすることが必要だった）——私は私の思想を行動の方に向けはじめた。トルストイがその『何をなすべきか？』によって私を援助してくれた。しかし社会活動にたいする彼の視覚はじつに暗かった！ 幸いにも、ラテンの地から私の方に春の息吹きが立ち昇ってきた。イタリアの永遠のプリマヴェェラ！…私はローマで、ファルネーゼ宮〔フランス大使館と考古学研究所にあてられていた十六世紀の宮殿。ロランはローマ留学中ここに滞在した〕で、二年の間、光明療法をうけた。私の初期の戯曲、私の初児^{ういご}たちは、この地でルネッサンスの「超人性」、力と美の刺戟高揚をうけた。しかし文学以前のニーチェ主義は青年にとっては、光明の欠けた、トルストイの社会苦悩にたいする自然の反動であり防禦ではあったが、しかしそれにもやはり蔭と慈悲とが欠けていた。それは陽の照りつける砂漠だった。英雄的個人主義は孤独であって、人類との絆を断ち切る。それは己が身のまわりに空虚を生ぜしめた。そして、コリオラススやホッツパー〔いずれもシェイクスピアの作中人物〕のように、彼は喚き、騒ぎ、自分が掘った穴に倒れるのである。生命は人間の交わりにある。その交わりを作り直そうではないか！

私たちはそれを作り直した、闘いの中に。ドレフュス事件は、私にとっては、「フランス革命」を眼ざめしめる結果をもった。革命は私に浸透した。バスチーユの牢獄を奪取した民衆の熱情と、革命議會の過激とを私は呼吸していた。私の想像にうかんできた行動の天才たちは彼らの英雄的なオプティミスムを私につたえた。このオプティミスムは私を救った。その当時において、もし救援がなかったならば、私を破滅に陥れるようにいっさいが共謀していた。

そのころ私が経験し、その後いくたびとなく経験したことは、人間の相互の離間反目の主なるものは、思想のそれでも利害のそれでもなく、むしろ氣質のそれ、すなわちオプティミスムとベシミスムという根本的対性に要約されるものだということ

とである。それは互いに敵の家である。私は彼らをどちらにも私の内に宿していた。そして私の生涯のすべての仕事は彼らを和合せようと努めることであった。

(中略) 後年、私は『ミケランジェロの生涯』の序文で、キリスト教的ペシニスムにたいする私の反抗をかなり痛烈に表明した。このペシニスムを私は自身の中にも、他の人々の中にもあまりにもよく見知っていた。そして私が尊敬し、あるいは愛していた若干の人々の例においても、その偉大さを感じながらも、私はそのペシニスムにたいして戦いを挑んだ。なんとなれば、そこには人間の進歩の否定がふくまれているからであり、また反動がそれと結託するからである。一方を攻撃するならば、他方をも攻撃しなければならない。私はそれを攻撃した——しかも私自身の内部において。それは決して容易なことではなかった!

ベートーヴェンが私をこの戦いにおいて援けてくれた。しかし何よりも多く、クリストフ、私の息子、戦闘の精神、創造する人間の彼が。人はどうして厭世的でありえようか。子供を生み、その息子が強くなり、また彼が成長するのを見るときに? 肉体の子供も、精神の子供も、共同社会の前進に私たちを結びつけるのである。——この悦びと社会連帯責任の高揚は『コラ・ブルニョン』によってつづけられた。

戦争〔第一次大戦〕が現われて、まず、それを中断した。光明のないこの戦争の年月のあいだに、ペシニスムと空想の魅力が再び現われた。(略)しかし、それと同時に、私たち若干の者は、あらゆる事情に抵抗して、精神の独立のためと、犠牲になった民族たちの解放のために戦った。

この戦闘は、それ以来決して停止したことはない。ペシニスムもオプティニスムも各々そこに利益を見出した。しかしそれは対立によってではなかった。彼らは連合提携した。新しい人間社会を建設し、それに勝利を得させるための戦闘に、その力を十分に発揮させなければならない。そして現実世界の不正と苦悩との悲劇的なヴィジョンは、行動にとっては、よりよき未来への光明確信に劣らずよい補佐役である。もし躍進的楽天主義がより所として、絶対にあともしない——すなわちいとわしい敗北の世界——過去を決して受け容れないという悲壮な決意をもたないかぎり、征服する用意も死ぬ用意も十分にできているとは言えないのである。

「道づれたら」序論より

——宮本正清 訳——

マルヴィーダとロランの往復書簡 (3)

南大路 振 一

Ⅰ マルヴィーダからロランへ

ヴェルサイユにて

1890年11月23日、日曜日

したい友、あなたにここヴェルサイユから書く手紙はこれが最後です。そしてあなたももう私にここ宛てに書くことはないでしょう。私にふかい興味と大きな喜びを与えてくれた先日の二通のお手紙については、私のほうから述べたいことがたくさんあります。あなたがラファエロ（昨年はまだ彼はあなたにとって親しみのない存在でした）をそれほど真心こめて愛するようになった後には、ゲーテを愛することももうまく行くでしょう。ゲーテはラファエロにひじょうに近いのです。『イグナーニエ』を読むとあなたは、私と同じように、あのミロのヴィーナスを前にしたときの気持に似たものを味わうでしょう。それは理想的な完成状態の調和（ホルモニー）にやどる静けさであって、このような調和は、もはやエゴイズムや見栄を意味するのではなく、神的なもの（神ではありません）の本性なのです。そしてあなたは『エグモント』なども好きになるでしょう。ゲーテその人については、あなたは私たちの最初のやりとりの機会に書いたことがあります——もともとゲーテはいつも非常な力であなただを引きつけ、そしてあなたは自分の反感にもかかわらずゲーテを愛していた、と。さあ、これからどうなるか見てみましょう！

ヴァチカンの美術館にたいするあなたの憤激は、私にはたいへん面白いでした。私も美術館、博物館といったものを忌^{いまい}忌しく思い、そこに、私たちの貧困と墮落の兆しの一つを認めます。つまり私たちは、感激を味わうには、過去の遺物——それ

本来の場所から無理に移され、こんなふうに雑然と貯えられたために、すでにその意義を失なった遺物を集積する以外の手段をもたないのです。ローマの美術にしても、もし私たちがこれら壮麗な寺院、これら公共の広場を、昔はそれぞれ意味をもっていた彫像の群——たとえギリシアの美術のあの繊細・優雅な調和は欠くにせよ、宏大・真正の華麗さを具現化し、魂をすっかり美的な感激で満たしたにらがない彫像の群で飾られている姿で見たならば、私たちの目にまったく違つたふうに映じたことのように。

(——) 私はこの27日、木曜日に出発するつもりです。私の旅が神々の守りのもとに行なわれ、私たちが喜ばしい再会を祝えるよう、どうか私のことを考えていて下さい。

ご機嫌よう、したいい友。

Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年11月25日、火曜日、朝

したいい友、お声を聞けなくなつてから久しくなりますが、もうしばらくで埋め合わせをしていただけるものと思います——それもお手紙によるのではなく、あなたご自身が到着されることで。あまりゆっくりしておられると、ただ冬から冬へ移ることになってしまいます。この最後のうるわしい数日を楽しんでいただかなくてはなりません。

先日、芸術の領域で一つの喜びにめぐまれました。テアトロ・コスタンツィでグルックの『オルフェウス』を見たのです。上演（オーケストラと歌手たち）の出来はかなりのものでした——大した才能はみられないが、悪い趣味もないというわけで。それで作品そのものが演技者たちのあのしばしば不愉快な個性といっそう対照

的でした。なんと美しい作品でしょう。ああ、劇場で演じられるにはあまりに美しい作品です！ このオルフェウスの崇高な悲しみを、無理解で利己的な観衆の愚かしい好奇心にさらしてよいものでしょうか——彼らは魂も心もなく、ただ大勢いっしょに消化すべく劇場に出かけるのです！ 有難いことにテアトロ・コスタンツィはほとんど空いていました。そしてただ第一幕の終りのコロラトゥーラに際してだけ拍手が起こりました。あなたご自身が細部の細部まで知っておられるに違いない——作品をあなたに思い出させる必要はありません。私は黄泉の国のような壮大な場面とか、オルフェウスの嘆きのような悲痛な場面にもまして、第二幕の終りの楽園の晴朗さを愛します。オーケストラがこの場面を弱音器つきで開始し、「浄福な者たちの広野」の描写が始まると、私は幸福のあまり——あなたの巧みな表現ですが——「とろけて」(zerfließen) しまいます。涙してほほえむのです。けだるい情愛、至福のメランコリー。ギリシアの浅浮かし彫りに表わされた死者たちの霊をウンブリアの風光のなかにみる心地です。——そしてこの幸福はいつもながら私を悲しくさせます。といいますのは、自分では欲しもしないし、またそのことを考えもしないのに、私は次のように感じるのです——この喜びは束の間のものであり、いまは消え失せた過去の、そして優雅さと気品をそなえた芸術のかすかな反響であり、肉体的・精神的にこの上なく洗練された時代の息吹きであり、いまはなき貴族社会のますます薄れゆく名残りである、と。そこにあるのは、愛されもし、ひどく中傷されもしたあの魅力的な18世紀なのですが、この時代について今では、その否定にほかならなかった退屈なえせ哲学的運動しか知られていないのです。

この前の木曜日にまたモンテ・マリーヨを散歩しました。しかし一帯はもう秋で黄色く染まっていました。あなたはおられませんでした。それで私にはすべてが一層寒々と感じられました。

選挙はこの不幸なイタリア人たちを彼らの道徳的無関心から揺り起こすことが出来ませんでした。ローマの町の全き平穏と、それに乗権者たちの数。これは私にとって選挙の結果よりもはるかに興味ふかく——そして遺憾にも——思われる二つの現象です。ポスターには少々面白くなりました。このローマ人たちはまことにグロテスクです。ポスターの一つには、「ローマの市民たち、一致して、シンシナート¹⁾

の再来ドメニコ・オリーヴァを選べ!」とありました。オーストリア公使館には、バルタサーレ・オデスカルキに投票しないよう要求するポスターが一面に貼りつけられていました。(なんと美しい名前でしょう! こんな名前をもつなら、鎧兜で身をかためていなくてはならぬでしょう。) オーストリア皇帝の侍従である B. O. には投票しないように、という要求です。いたるところポスターに(しかもポスターにだけ)「トレントとトリエステ万歳!」の叫びが聞かれます。こっけいなほど多数の憲兵と警官がコロナ広場の公使館の建物を切れ目なく取り巻いていました。オーストリアにたいし、「当地では諸君はこんなに憎まれている!」とこれ以上はつきり言うことは不可能でした。バルツィライ²⁾の敵たちはぎりぎりの瞬間に、「ラテン連盟急進委員会、パリ」なるもののバルツィライ支援の短い、にせのアピールを(R. F.³⁾の文字を頭につけて)貼らせました。これにたいしバルツィライのほうは急いで強力な防衛策を講じなければなりません。けっきょく候補者たちは物すごく興奮しました。しかし選挙人たちは全然です。(――) さようなら、したしい友、あなたを衷心から愛します。

R. ロラン

注

- 1) ラテン名は Cincinnatus. 前5世紀にローマを国難から救ったという農夫。しばしば古代ローマの質実剛健の典型とされる。
- 2) Barzilai 1890年11月23日付けの母への手紙(「全集」33巻, 359ページ)によれば、トリエステ生れのジャーナリスト。――イタリア統一(1861)後、トレントとトリエステなどの帰属をめぐるオーストリアとの紛争がつづいた。
- 3) 「フランス共和国」の略。

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年12月6日、土曜日

(一一一) あなたは昨日、類いのない喜びを与えてくれました。いや、喜び以上のものをです。いいえ、あなたはピアニストではありません。あなたは音楽する魂です。それで私たちの心の奥底まで感動させるのです。どうかこの次には——あなたの考えでは——私に悲しみを与えるであろう作品¹⁾をもって来て下さい。おそらくそれは回顧に伴う悲しみでしょう。私は悲しみそのものがもう一度よみがえるだろうとは思いません。もしかするとあなたは、あの頃の私の苦しみを理解しきれなかったのです。私がああなたの発展——私はそれをイタリアの詩(ポエジー)のせいになりましたが——を喜びに満ちて見守り、そして私もそれに些か寄与できる満足に浸っていた時、私は、それが或る感情——おそらく苦しみのうちに終わるだろうし(私はこのことを知っていました)、またすでにあなたに苦しみを生んでいた或る感情の反映であることを逆に知らされ、失望を味わわねばなりませんでした。私は今ではこのことすべてをよく承知していますし、もう一度これに似たことが起こった場合、あなたが私にもはや隠しはしないだろうと期待しています。もちろん私はさしあたりあなたが、人生の感情面よりも高くにある使命のために留保されているのを見たいです。人生の感情面は然るべき時に——それがあなたの将来の道をもはやかき乱すことのない時にやって来て、みずからの権利を主張するでしょう。それではその作品を遠慮なく私にみせて下さい。私はそれをまったく客観的に評価することを約束します。それから私はあなたの他の作品を二倍だけ楽しむことでしょう。

(一一一) 私はあなたにシェイクスピアの運命論について話すつもりでした。しかしペットのなかで書くことは疲れます。

それではご機嫌よう、また明日の夕方に。心をこめて無数のあいさつを!

注

- 1) 『ローマの春』と題された恋愛小説のことと思われる。

Ⅳ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年12月13日、土曜日

　　したい友、私はこの第一幕¹⁾のことをしきりに考えています。そしてまだ読み終えてはいませんが、あなたの選ばれた形式がまさにカタリーナの性格を描くのに適切なものと思います。彼女はことば巧みな男——倫理的に墮落した自然をおおう華やかなうわべと、罪を犯しはするが依然として高貴で、詩的でありうる本源的な自然のもつ誠実な荒々しさととの相違をただらに感じとるのです。私にはこの第一幕が完全に芸術的な仕方て戯曲の導入部になりうるとさえ思われます。つまり、ルネサンスの特徴をおびた平和な粹組のなかで、すでに、情熱のたぎりと、それがとらざるをえない悲劇的な結末を予感させうるとさえ思われるのです。もしかすると私が間違っているかも知れません。勿論あなたの感情が決定しなければなりません。しかしあなたが執筆されたものを想像してみますと、戯曲全体への導入として他の部分と完全に合致すると思えるのです。とくに第二幕のはじめ——オルシーノがフィレンツェをなつかしむ場面とは。(フィレンツェでは行動の生活にはめぐまなかったのですが。) いずれにせよ作品でこれを見せて下さいますね? さもないと私はあれこれと考へ、自分で仕舞いまで創作しかねません。

　　また私は考へました——あなたとして、当分そのままにしておく仕事と、学院のためのまだ手をつけていない仕事との中休みの数日を、モーツァルトに関するあの素敵な論文²⁾の仕上げに利用できないものか、と。この論文はきっとあなたの頭のな

かでは完結しており、ただ紙面に移せばよいのでしょう。これにはあなたが精魂を傾ける必要はありますまい。もし私がさし出がましいと思われるなら、どうか許して下さい。私があなたをせき立てようというわけではありませんが、私のほうは自分のできる一切のことを幕が下りる前にしておくため急がなければならないのです。

天候は今日も悲しい気分を追い払うのに打ってつけという訳にゆきません。それで少なくとも、あなたの心と一つになる心がこの世にあることを考えて下さい。そして明日はデッサン集の写真をもって来て下さい。それからここへ来る前にケーキをたべないこと！ さもないとヴェルサイユの人びとのあの軽い冗談をあなたが悪くと思ったのだと考えます！³⁾

ご機嫌よう、では又。あなたの友

M. マイゼンブーク

注

1) 戯曲『オルシーノ』のこと。

2) 『昔日の音楽家たち』に所収の「モーツァルト論」のこと。当時、マルヴィーダによって独訳された。

3) 若いロランのケーキ好きについて、モノ一家の人びとが何か冗談をいったのであろう。

V マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年12月16日、火曜日、午後3時

したしい友、第一幕を読み終えたところです。おお、愛する、よき友よ、私はあなたに言わずにはおれません——あなたは偉大な詩人です。このことをあなたに言う最初の者である仕合わせをどうか私に与えて下さい。いまの瞬間にこのことがあ

あなたにとって何の価値もなく、全くどうでもよいことであることを私は知っています。私はすべてを理解します。そしてあなたと共に、あなたのために感じます。しかしまさにこういった深い苦しみからいつでも偉大な詩作品は生まれたのです。それは一つの秘密であり、もしかするとすべての秘密のうちで最も感動的な秘密かも知れません。タッソーは言っています¹⁾

「人間は激しい苦しみにあうと黙ってしまうのに、

神はこの私には、悩みを言葉にあらわす力を与えて下さった。」

この第一幕は見事です。少しの変更を加えてもいけません。これは以下につづく部分への導入として非常に芸術的にできています。リオナルドの「説教」は詩と哲学と感情の珠玉です。性格はどれも鮮やかに描かれています。そしてここに提示された、洗練されると同時に退廃した社会の快よい像は、すでにこの戯曲のすべての萌芽をふくんでいます。はっきり申しますが、私はあなたの作品であることを念頭におかないで魅惑され、感動させられました。その作者をたとえ知らなくても、私の判断は変わらないでしょう。神のめぐみを享けた詩人をついに再び所有する何という幸い！

私はあなたがローマを去ろうとなさるような暗い予感がします。しかしそれがあなたのためになるのなら——あなたのうちに生きていて、羽ばたきに備えているにちがいないこの貴重な天才（ゲニウス）のためになるのなら、それを甘んじて受けましょう。

では明日に——そうでしたね？ おお、私は心の奥底からあなたを愛します。

M.

注

- 1) 16世紀イタリアの大詩人 Torquato Tasso を扱ったゲーテの戯曲（1790）の終末の場での科白。

Ⅶ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年12月23日、火曜日の朝

したい友、昨日の私たちの話のなかで、やはりはっきりしない点が二、三あります。それを説明して下さいようお願いします。

まず私によく分からないのは、私と私の将来についてのご意見のなかにあると思われる確かな矛盾です。一方では、私の書いたものでこれまでお読みになったものはあなたの気に入ります。あなたはそれについて多くの賞賛——ひよっとすると多すぎる賞賛を述べられました。また一方であなたは、私が将来、芸術とは別の何かを身を捧げることも不可能ではない、とお考えです。あなたは私が来年これらすべての芸術的関心をそのままにしておいて、日毎に反復される職務の非情な単調さに服する可能性も認めておられます。あなたは私にたいし殆どこのほうをお勧めです。それでは、私としては立っていたいと願う^{こゝ}でよりも、^{あちら}のほうで私が自分の場所をよりよく占めるだろう、とお思いですか？ ほかのすべての点と同様にこの点でもどうか容赦なく、そして私たちの友情に気がねすることなく、私についてのご意見を言うていただくようお願いします。

次に少ししがったことを——。あなたはおっしゃいます、「私はあなたをせき立てようとは思わない」と。それでもあなたは^{そう}しようとされます。そして私自身も急ぎたいと思います。しかし現に私は急いではないのでしょうか？ この三ヶ月というものは片時も失いませんでした。それでいてあなたは何を私から望み、期待されるのですか？ 新しい作品を一つですか？ それとも新しい作品を二つですか？ それとも他のものを？ もし私が特定の作品を一つ仕上げ、何か^{一つ}の信仰を生み出し、何か^{一つ}だけ目標を達成しなければならないというのなら、それなら私は急ぐ必要があるかも知れません。しかし私は芸術の作品をいくつか創造すること以外に何もする考えはありません。いや、けっしてそのことを考えるのではな

く、無数の生——私がそれらを生き、芸術の夢のなかに実現したい無数の生のことを考えるだけです。それというのも、私はそれらの生を愛しており、私自身の生は私にとって退屈なのです。ですから何がこの私をせき立てるというのでしょうか？

もし誰かが私に向かって、来年私が死ななければならないと言うなら（もともと私は幼い時から死についての思いと共に生きて来ました。この思いは以前には私をひどく苦しめましたが、今では何ともありません）、ええ、もし私が数ヶ月のうちにはこの世にいないと知っているなら——私はそれだからといって自分の仕事を一歩でも早めるでしょうか？ 私は自分の内部に生きているものを言おうとして急ぐことは決してないでしょう。私は作品をつか二つ余計にあとに遺しておこうと努めはしないでしょう。また何のために？ 人が書くものに大した意味はありません。本質的なのはそれを書くことの喜び（もしくは安堵といったもの）です。ご存知のように芸術における私の理想はベートーヴェンよりはますますモーツァルトに傾きます。樹木はやがて^な生る実のことを考えはしません。見事な^な実を生らせようとしてすべての精力を使いきる樹木がもしあれば、それは不自然というものです。樹木は喜ばしい^な平静のうちに成長しなければなりません——どんな^な実が生るかなど気にかけず、ただ発育の幸福に浸って。それでいて、もしその樹木が良質であり、その根を豊かな^な土壌に下ろしているならば、立派な^な実ばかりが生るでしょう。ですから何のために急ぐというのでしょうか？ 少なくとも、芸術が^な実際に世界にたいし作用すると私に考えられるのなら！ しかし私はこのことを信じません。——その上、この世界もいつか滅びることでしょう、私たちと同様に。そしてもし世界が滅びてしまえば、世界にとってこれら一切、これら一切が何の役に立つというのです。ああ、私はワグナーのことばを思い起こします——芸術がもつともよく教えること、それは人生のみじめな無常性、「欠如」(Mangel)、私たちのなかにある恐ろしい欠如、何物によっても満たされえない、この大きく開いた空虚である。創造主にたいし、彼がいかになすべきであったか——そして実際はなさなかったかを示してみせる芸術家は一人の神である……

昨夜こんな考えがすべて私の^{こころ}精神を動かしました。そして目がさめるや否やこれらの考えをあなたにお伝えします。これらの中にこの一年のような病的な「不機嫌

の痕跡を見ないで下さい。活動的であろうとする欲求がすっかり私を満たしています。そして私がどう考えようと、また何がやって来ようと、私はつねに活動的であるでしょう——私が生きている限りは。

心をこめてあなたを愛します。

ロマン・ロラン

Ⅶ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1890年12月23日、火曜日の朝

したい友、昨日あなたは最後に二言、三言いうとさっさと帰ってしまいましたので、私は答える暇がありませんでした。そのとき言いたかったことを今あなたに言います。しかも腹藏なく言うためにです。といいますのは、心の動揺をおし隠す^{たま}あの堪らない沈黙、或る人びとの名前などを口に出せないはにかみ——要するに、あの頃この私をあれほどひどく心配させた一切のものがもう一度もどってくるのは困るからです。

どうしても来ざるをえない瞬間を私はやはり一種の不安をもって待ち受けました。しかし、この秋に獲得した勝利が永続するだろうという、また天才（ゲニウス）の偉大な情熱の発展が不安定な情熱を制するだろうという秘かな希望をいただいでいました。あなたの作品を読むこと、そして私の夢が実現したのを見ることで私がどれほど楽しい思いをしたか、それは口では言えません。それは私の魂を光で満たすほど純粋な喜びであり、あなたにたいする私の愛情を倍にしました。しかし夢は短く、もう終わりました。私が思い違いに身を委ねることは二度とないでしょう。もしあなたが先日のめぐり合いのことを、私たちの間にやっと生まれたと私が思った全き信頼でもって話してくれたなら、私はそれがあなたの心を波立たせずにはいなかったことを納得したでしょう。しかしそれがあなたとあなたの天才（ゲニウス）の間

に割り込むことを不安がりはしなかったでしょう。しかしあなたはしませんでした——私のほうであなたがしやすいうようにした昨晚でさえも。これは私にとって、あの以前の魔力がふたたびあなたを虜にってしまった動かしがたい証拠です。この魔力は、私があれば多くのことを期待していた今年中ずっとあなたを支配し、そして多分あの頃のようにひどい不機嫌と沮喪のうちに終わるにちがひありません。私が世界という大きな舞台を去る前にあれほど味わいたかったあの発展は、この沮喪のために、少なくとも私にとっては、ずっと先まで延びてしまいます。いま私があるあなたを知るかぎり、あなたはひたすらこの再発のなかに生きており、あなたは見せかけの外面の平静にも拘らず、内面はたった一つの事でいっぱい、それ以外の何物もあなたの興味をひかぬことが私には分かります。はや、あなたの仕事はうまくゆかず、あなたを満足させることもありません。これは誰にでもみられる心情の物語です。私は一人の天才の物語を思い浮かべていたのです。それは過ぎ去りました。あとには崇高な結尾の和音の代りに、幻滅がもう一つ残っただけです。——しかしどうしてベートーヴェン以外のものを要求することがあるのでしょうか？彼のドラマを私は昨晚よく理解できました。

あなたは承知しています——あなたにたいする私の関心はいつまでも変わらぬこと、そして演奏によってあなたが私に示して下さる好意にたいし私がいつも深く感謝するだろうことを。しかし私たち二人の間ですべてがはっきりするよう、私はまずすべてを言いたかったのです。今後あなたと話し合うとき、私は何の底意ももたないようにします。ほかのすべてのことと同様に遠慮なく論じます。そしてこれまで口にされなかったことを名指しで言うでしょう。それでは明日、かわらぬ友情であなたをお待ちします。

VIII ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1890年12月23日、火曜日の夕方

　　したい友、あなたは私がこの手紙を書くことを余儀なくさせます。自分から進んではしなかったでしょう。ついでに申しますが、私は今晚こうして述べることを恐らく明日また私たちの会話のなかでくり返すでしょう。しかし私は自分の返事をもっと明確にしたいと思い、それでじっくり考えながら書きます。

　　私の心について多くの事をあなたはよく理解なさっていません。一部分それは私のせいです。いや、私のせいではなく——私の意志です。

　　或る種の沈黙——あなたをご存知の秘密についての沈黙も、あなたはいつも信頼の欠如だとお考えです。それはあなたの思い違いです。私があなたに向かって自分の恋のことを口にしないのは、それをあなたに知られたくないからではなく、それについて語ることで私が苦痛をおぼえるからです。ええ、それが精神的な苦痛でもあるからです。諸国民の知恵は主張します、「分ち合えば悩みも半減する」と。諸国民のこの知恵は私のものではありません。私が心のなかに秘めている悩み——それは私のものです。もしそれを他人に伝えるなら、それは外的な暴力という形をとり、この私を圧迫します。

　　どうしてあなたに水曜日の朝のめぐり合いのことを話さねばならなかったのでしょうか？　すでに私のなかで落着いた出来事をもう一度よみがえらせるために？　私以外の誰の口からもお聞きになっていないのなら、私の口からそれについて何をお聞きになることがあるのでしょうか？　この思いがけぬ出来事を推測させるような何かを、あなたは私の顔や言葉のなかに気付かれたのでしょうか？　水曜日の私は前日までの私と同じではなかったのでしょうか？　私は十分に自制していませんでしょうか？　それで一体あなたはこれ以上さらに何を私から要求なさるのですか？

　　あなたは私の「秋における勝利」を云々されます。私はこれをあなたに説明しなければなりません。9月15日の私も今日の私も変りはありません。私は自分の意

志を支配できます。私のいうことを正しく理解して下さい、自分の意志^{いし}です。しかし、けっして自分の心、自分の感情を支配はできません。それは私にはできません。また、そうするつもりもありません。恋——少なくとも真の恋は——けっして意志^{いし}には係^{かか}っていません。ただ一つだけ意志^{いし}に係^{かか}っているものがあります。それは私の思考と魂の発展です。私がこの秋に「勝った」時、私は自分に言いました、「それでも私は生きるだろう。そして私の自我^{じが}を守り抜くだろう」と。しかしこの「それでも」を私はこの世から無くすことが出来たでしょうか？ 私はそうはしないで、以前とまったく同じように恋しました。そしてこれからも恋することでしょう。しかし「それでも」私は生き、私の自我^{じが}を発展させます。それ以上のことをあなたは私から要求なさることは出来ません。

9月以来、私はあなたに自分の恋愛問題をお話したことはありません。彼女の名前を口にすることはなく、そして今後も口にしないでしよう。このようなことを語るのは不必要^{ふじやう}——まったく不必要^{ふじやう}であり、ただ苦痛であるからです。どうして今日になってこれら一切をよみがえらせようとなさるのです。こっけいで不幸な恋をむなしく隠そうとする不器用な努力で、私はあなたを不機嫌にし、退屈^{たいくつ}がらせたでしょうか？ いいえ、私には自制することが非常にうまくいったので、あなたにとって私が昨年よりずっと話好きに見える場合がしばしばありました。そしてお手紙のなかでも私が9月くらい「解放されている」とお考えのようです。

しかし事実はその逆です。そしてよく考えていただきたいのです——私の存在の根底までかき立てたあの情熱の嵐^{あらし}がなければ、最近あなたが私の作品として読まれ、今後も読まれるものを書くことは、私にはけっして出来なかったでしょう。情熱の虜^{こゝろ}となった私は、あり余るほど帯電し、稲光りによって放電する雲に似ています。情熱を取り去ってご覧なさい。あとには何の実質も現実味もない空虚な影、短命の幻^{まぼろし}しか残りません。

私がいちばん悩んだのは8月と9月の初めです。その月に私は『エンペドクレス』を書き、『オルシーノ』の構想を練りました。これを指してあなたは情熱のために私の「発展が先へ延びた」と言われるのですか？

もしこの私が、芸術の世界で名をなすことを些かでも重要視するなら（実はまっ

たく無頓着なのですが)、逆に私は生涯いつでもこんなふう^{.....}に悩み苦しむことを願うでしょう¹⁾。しかし私はそこまで自分を犠牲にする気はありません。

これで終りにしましょう。あなたご自身、ともかく私の「みせかけの外面の平静」を承認なさっています。これだけでも相当なものとしていただかなくてはなりません。私からこれ以上のものを要求なさらないで下さい。オルシーノは言います、「私のうちにあるものは私のものだ」と。(――)もしよろしければ、これ以上この問題には触れないでおきましょう。あなたには私のうちにあるもの、私の内部で起こっていることをお知らせします——しかし大筋だけにとどめます。芸術の世界のなかで一緒に生きましょう。そして何の結果にもならない対話は締め出しましょう。この問題を話し合うのは今晚が最後です。

深い愛情をもって

ロマン・ロラン

私もベートーヴェンがよく理解できます。

注

- 1) 「情熱」の原語 Passion は、本来、「苦しみ、悩み」の意味を含んでいることに注意。独訳ではこの関係が名詞 Leidenschaft (情熱)と動詞 leiden (苦しむ、悩む)によって巧みに暗示されている。

IX ロランからマルヴィエーダへ

ローマにて

1891年1月

大急ぎであなたに、ベートーヴェンがかつて存在した音楽家のうち最大の魂であることをお伝えます。すぐこの手紙を受け取って、大切にしまっておいて下さい

——必要なきには私にさしつけられるように。一時間もすると私はこの感嘆の念を捨ててしまうかも知れません。今はまだエロイカの葬送行進曲の印象が消え去りません。

自分で感じるのですが、ベートーヴェンにたいする私の不当な態度は、一つには、崇拜者たちのまさに大多数が私にいだかせる軽蔑の念から来ています。愚かしい連中が誰も彼もこの魂を愛すると主張し、その実、愛しはしないで大抵はそれに感動もしないのを見ると、私はこの魂の価値を疑うことがあります。私はその場合、大衆が自分自身をその中に見出せるようにと、この大河がみずからの流れのうちに運んでゆかねばならない泥土のことを思います。しかしこの気の毒な人間は生涯あれほど不仕合わせだったのですから、当世のこのような侮辱的な賛嘆もやはり賛嘆として彼に許してやらねばなりません。

昨日あなたが悲しんでいらっしゃったので、私はこんなふうに目的らしい目的のない手紙を書きます。その悲しみは一つには「私のせい」であり、「私のために」なのです。（おっしゃり方はいろいろですが、あなたの悲しみはいつも私に関連しています。）そして私はこれを好みません。あなたの不幸（あなた自身がおっしゃったのですから、私はこれに注意を払うべきでした）——あなたの不幸というのは、あなたの友情がいつも「活動的、实际的」であろうとし、時折、不可能事につかかるとです。いや、しかし、この私があなたにたいし言わねばならぬのでしょうか——一切は必然によって支配されるのであり、支持も反対も何一つなすべきことは残っていないのだ、と。服従するか圧倒されるか。いずれにしても人は敗北者になるのです。しかし、願っていたものが成就する場合でも、その逆の場合に劣らず敗北者であると自分に言いきかせることが出来るのは、一つの慰めです。——しかしもう十分です。慰めることは私にふさわしくありません。私自身が悲しくなるでしょう。そしてそれは私の反抗心が許しません—— 天気がこんなに悪く、物悲しい今日は。

母は『オルシーノ』のはじめの二幕を受け取りました。今あとの二幕を送ったところです。全体を読み返してみても（ところどころ、ほんとうに退屈でした）、すっかり気に入ったのは最後の場面だけです。ついでに言いますと、この作品全体につ

いて唯一の眞の喜びは書くことにあったのです。
では又、したい友、心からあなたを愛します。

R. ロラン

X マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年1月14日

「死者たちの静かな住みか〔冥府〕をとりまく
レーテ〔忘却の川〕の黒ずんだ流れのように、
愛の杯はよき人びとの
あらゆる誤ちの思い出を消す。」

このように——したい友よ——あなたの“gentilezza”，やさしい親切は、私を
私自身と和解させてくれました。私はこれまでもあなたを愛していましたが、これ
からはさらに千倍も愛し、大切に思います。それでは、私たちはもうしばらく一緒
に喜びと苦しみをくり抜けて行きましょう。そしてどうか、あなたが私に与えて
くれたすべては、私が——あなたのせいではなくて——あなたのために苦しんだも
りの千倍の価値があることを確信して下さい。

では明日また、したい友よ。

M. M.

XI マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年1月19日、月曜日の朝

目がさめた時、私はいいことを思いつきました。それで急いであなたにお知らせします。あなたのサルヴィア¹⁾をここへ持って来て、あなたが〔シチリアへ〕出発されるまで毎日午前中はここで仕事をおやりなさい。あなたがいつも翌日まで書類を置いておけるように、机を一つ備えることにします。コロセウムの見える暖かい部屋でなら、あなたの仕事は今ほど味気なくは思えず、また迅速に進むでしょう。私たちは背と背を向けて、お互い邪魔しないことにしましょう。午前中は来客はありません。ここへ来ることであなたは、ピンチョの丘へ行かなくても、そのまま散歩をすることになります。ピンチョはこの時期にはそれほど魅力がありません。もしトリナ²⁾が何か私たちのために朝食を用意してくれるなら、あなたはここで朝食をとって下さい。そうでなければあなたのレストランへ行って下さい。——あなたがシチリアから戻られてからは、おそらく天気はよくなるだろうと思います。どうかそうして下さい。私にとっては嬉しいことなのです。そしてあなたにとって今ほど寒々とはしないでしょう。太陽が顔をのぞかせ、そうだと言っています。

注

- 1) 枢機卿 Giovanni Salviati (1490-1553)。パリ駐在の教皇大使として活躍した。
——ロランがローマから母へ宛てた手紙にしばしば言及されている。
- 2) Trina. マルヴィーダの長年の、忠実な女中。

XII ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1891年1月19日、月曜日の夕方

私のしたい友！ほんとうにご親切なことです。あつくお礼申し上げます。しかしそれは出来ません。あなたは私という人間がおわかりでないのです。いいですか、私は一人にいる時、日にほとんど二、三ページも書けません。もしあなたのところにいれば、たった一行も書けないでしょう。あなたのところへ行き、あなたに会い、あなたと言葉をかわすことで過ぎる時間。さらに、あなたと折り入って話したい気持。——私には午前中たった五分も残らないでしょう。ところで、どうか私のことをあまり気の毒がらないで下さい。ファルネーゼ宮での私の孤独には喜ばしいものは何もありません。しかし不快でもありません。少しばかり寒いですが。しかし私はいろんな夢にふけり、これが寒気を追い払ってくれます。

いまの仕事が愉快なものなら、あなたのところへ出かけるのですが——。いずれにしてもあつくお礼申し上げます。

深くあなたを愛します。

ロマン・ロラン

XIII ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1891年1月29日¹⁾

「勇気を出すのだ！——肉体のあらゆる欠陥にもめげず私の精神力が支配するのだ。——25才！ そうなったのだ。今年こそ一人前の男子になるかどうかが決まるのだ。」

ベートーヴェン、1796年1月1日。

注

1) ロラン25才の誕生日。

XIV マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年の、愛する1月29日

　　したい友、何とすばらしい回り合わせでしょう。ほんとうにあなたのために書かれたようであり、その上、数字まで——。そうです、これが現在の状況ではこの日にとって最適のことばです。そしてこのことばを自分の気持の表現としてわが物にされたことで私はあなたを祝福します。このようなあなたを私は望ましく思います。そして何がやって来ようとも、私はこのことで味わたった、すべての人間的な考察を越えたあの純粋な喜びをけっして忘れはしません。その喜びで私は、私にとっていつまでも大切なこの日を迎えます。男子が自分を決めること——これが本質的なことです。そして他のすべては——戦いつつ死ぬことですら——枝葉のことです。白状しましょう、昨年の或る朝あなたがM[ミンゲッティ]夫人のところピアノに向かわれた時、私はすでに一度このことを考えました。——あの頃すでに私はあなたの本質についての啓示を味わたったのです。そして今その啓示はすっかり私のものになりました。私はあらためて何度あなたを祝福するばかりです。私はあなたの前途にあるものを見過すほど観念的ではありません。しかし凡庸な人間たちの平穩無事のなかよりは、戦いのなかにいるほうが、あなたにはよりよい境遇でしょう。もしお疲れなら今晚は来られないで休んで下さい。そしてあなたを待ち受けている障害に静かな反抗をなすよう、どうか力強くあって下さい。私の心と思いはあなたの許にあって、私があなたに会おうと会うまいと、あなたを抱きしめます。

<訳者あとがき>

1890年の夏期休暇をパリで過ごしたロランは、10月18日に同地を発ち、南フランス、ジェノヴァ、フィレンツェをへて、11月5日にローマの宿舎ファルネーゼ宮に帰った。一方マルヴィーダは一ヶ月あまり遅れてヴェルサイユを発ち、12月1日にローマの自宅へもどり、二人のあいだには再び日課のような文通がはじまった。その頃ロランが母親に宛てた一連の手紙（「全集」33巻『ローマの春』に所収）を併わせ読むと、いっそう興味ふかいと思われる。



UN BEAU VISAGE A TOUS SENS より

スイスのオーギュスト・フォレルに

1915年7月8日(木)

ドイツ魂に関するあなたの立派な論文は熱烈な興味を私にあたえました。一国民の魂と人が呼ぶものは、様ざまな人種、気質、思想などのポリブ母体だと私は感じています。そして、歴史において、時おり判別できるように思われたことは、それらの種の中のいずれかが、こもごも優勢を占めるということです。それは、政治的事情が或る人種に権力をあたえるか、或はまたそれらの人種間に、或る人種どもの一時的疲弊と、他の人種たちの再生によって、回転の現象が生じることなのです。人種——（私は厳密な意味でこの人種という言葉を用いるのではなく、むしろ、人種的、或は知的、或は社会的集団）—— 支配的立場の集団が、或る期間のあいだ、その国民に本質的特徴をあたえます。その特徴がその国民の化身のように見えます。しかし50年か100年後には、その国民が変わったことを発見します。しばしば、その変化は主として、もろもろの要素が加わったことによるものです。—— フランスにおいて、政治的、精神的生命の軸がしばしばどのように移動したかをご覧ください。

15世紀と16世紀、シャルル7世からアンリ3世時代の芸術的、国家的生命の中心であったロワール河流域のフランスが今日いかに目立たない地位を占めていることでしょう。その頃にはゴールの活気が広域にわたって溢れていたところですが！北フランスが勝を制するか、それとも南フランスが勝利をうるかによって、国全体がなんと違った相貌を呈することでしょう！—— そして、これらの地方の相違に注目するまでもなく、思想的親族とか、支族とか、類似の慣れをもつ群れが形成されるのは明かであり、不断の行動や反動のリズムが、時には或る民族を、また時には他の民族を権力の座に着かせることは明瞭ではないでしょうか？ 40年このかたの、フランスにおけるこの動揺を見ると、次の「時代の支配者」にどの民族がな

るかをほとんど予想することができます。

一つの国民の精神の変化にわれわれはしばしば驚くことがあります。しかしその国民の可能性、その国民のもろもろの潜在的な人格は、その国民が実現するものよりはるかに富んでおり、はるかに多種多様であります。ただしかし、観察者たちは表面的であり、18世紀以来、政治的専制主義によって、自然に反する合理主義によって、無理に造り上げられたもろもろの大国家の人為的な結合は、一着の鎧のうち裡に、圧迫の下に萎縮してしまった、上記の多様な生命が閉じこめられているのです。

このようなメモを慌しく書きなぐったことをお恕ください。そして私の心からの共感をお受けください。

ロマン・ロラン

フェルディナント・アフエナリウスに(ドイツ)

1915年7月28日

……私の努力がぶつかる 無理解に疲れはてて、しばらく隠れ家に隠退する決心を表明しようとしていた時にあなたのお手紙がきました。従って私は、目下のところ、雑誌や新聞の論争に加わることを望みません。— 次の文は公開すべき性質のものではなく、個人的な、新密な手紙と見なしてください。…中略… 私は自分が自国民を代表する権限をあたえられているとは思いません。私にはいかなる権利もあたえられていません。私は自分の名において、またすべての国の自由な良心たちの名においてのみ語ります。両国の国会議員間の論争が効力をもたないことをあなたご自身が証明しておられることを申し添えます。何故かという、両国民がそれぞれ自分の権利と勝利を確信しているからです。そしてあなたが言われるとおりです。いやそれでも！理解の余地が一つあります。しかしそれは他の場所で捜さねばなりません。祖国の外に、祖国の上の方に、無形の祖国どもの中に— キリスト教の偉大な共同体の中に、さらに大きな人類の文明の中に、永遠の「都」(Cité)の中に捜さなければなりません。アフエナリウス様、どんな事が起ろうとも、私たちが同一の国民として残るのは、そうした国の同市民としてです。私たちが絶

えず想起すべきは、そうした共通の起原のことです。数か月この方の私の行動はそれ以外の目的をもってはおりません。思想家たちは何をしていますのでしょうか？何という狂乱にそそのかされて、彼らの本質的な尊厳を否定し、群集の熱狂に加わるのでしょうか？この激烈な戦争に彼らが参加することが何の役に立つのでしょうか？憎しみと傲慢とを煽り立てるのに人は彼らを必要とするのでしょうか？もしも諸国民が国民の義務ということ、薄ぼんやりとでも感じていたなら、彼らが口出しする理由が、私にもある程度わかることでしょう。ところが、それどころか、彼らは錯乱に到るほど夢中になっています。彼らと共に錯乱に陥ることが彼らに奉仕することだと信じるのでしょうか？頭脳が混乱した人々に代って、自分の頭を健全に保ち、また盲目めくらになった人々に代って、澄みきった目をしていることこそ義務です。戦闘が外で行なわれている時には、見捨てられた家庭や、精神の神殿に心を配り、彼らが風に吹きさらされることがないように、理性と宗教とが、今日のように、罪深い、恥辱的なふうに穢されて、放置されることがないように注意すべきです。この本質的な義務をドイツとフランスのほとんど凡ての思想家が怠りました。ただわずかにイギリスにおいて、若干の大胆不敵な良心たちがこの義務に忠実でありました。今回の戦争は、あらゆる中立性を、政治的中立を、「教会」、「芸術」、「科学」のように目に見えないもろもろの力の中立性を踏みにじりました。私は人間の理性のために、神聖にして侵すべからざる一つの避難所を要求します。哲学者たち、学者たち、芸術家たち、あなた方の持場についてください！あなた方の目が、戦闘とその愚劣な殺戮の上にじっと注がれたままではないように注意すべきです！アルキメデス（古代の偉大な科学者）のように、包囲された都市であなた方の仕事をつづけてください。人間の嵐のただ中で、一つの問題を解く1人の科学者は、93人の知識人の凡ゆる宣言よりも世界のためになると思われませんか？永遠の事物のために働きましょう。不滅者の生ける良心として留まりましょう。——それが何の役に立つのでしょうか？それは講和談判を1日たりとも早めるのでしょうか？いいえ、それは私たちの義務ではありません。赤十字が戦争中に負傷に手当をするように、私たちは精神の援助をあたえ、救わねばなりません。事物の渦巻きの中で人間は一つの定点を持つべきです。その定点を昔は教会があたえました。今日では、教会はもは

や存在しません。戦っている国民の数と同じ数の教会があり、同じ数の神があります。そしてその各々がその部族の野蛮な神の姿をしております。近代人、キリストの息子たる人間、精神の英雄たちの相続者たる人間は、それらの物神（土人などが崇拜する物神）に満足することはできません。彼は自分の普遍性を自覚しました。彼は苦しみ、生命の均衡を失い、自分を宇宙の全体に結びつけている物をもはや感じません。科学に、また芸術に、一つのつなぎの絆となるべきです！中世初期の修道院のように、彼らこそ、静穏と、慈悲と、光明との避難所であるべきです！彼らの恩沢は、徐々に、外部に光を放つでしょう。戦争の負傷者たちはそこに安住の地を求めに来るでしょう。そして、少しずつ、疲労が回復するにつれて、夜になって、疲れた軍隊の中に沈黙が生じるにつれて、人は神の国の鐘の音を聞くでしょう。アフエナリウス様、神の国の人民として私はあなたにこの手紙をしたためています。私たちの間で論争をする代りに、神を護りましょう！私は彼の名において、あなたに兄弟の挨拶をいたします。

ロマン・ロラン

フレデリック・ヴァン・エーデンに（オランダ）

1920年8月18日、水曜日 シェネック

親しい友 会話の中で神経衰弱という言葉を用いたことをお詫びします。私は或はあなたほど重要な意味をそれに与えなかったかも知れませんが、私の意見では（私の場合も、私の妹の場合もそうですが）慢性的神経衰弱の短い発作が起ることがあります。それは発熱性の変動のようですが、強度の活動性を有し、勢力も衰えはしません。私が言いたかったのはそれだけです。

私に打ち明けてくださるあなたに対して、私はそれを打ち明けることがもちろんできます。私は自分の内に、子供の頃から、底の深い苦悩をもっています。それは、いろいろな時機に、最後の苦悩にまで高まってきます。私はつねにそれが在るのを

感じます。それは私の生涯の伴侶です。しかし私は、私の気持を他の人々が読みとって、がっかりしないように、努力し、その心配から彼らを守るように努力しました。人が苦しんでいる時に、苦しんでいる（他の）人々を救おうと努力することは、また自分自身を救う最良の手段です。——それに私が認めなければならないのは、あらゆる状況、もっとも絶望的な状況の中で私を救ったのは、決して私の明晰な理性でも、意識的な意志でもなく、人がもっとも予期しない時、夏のもっとも乾燥無味な中からとつぜんほとぼしり出た、神秘的な、絶対的な生命力——もろもろの世界を動かしているその「力」です。

悪に、「痛みに、罪悪に、嘘に、神的な価値を認めるかということですが…いいえ、それは、決してありません！——少なくとも、「神的な」と言い、または「神」という言葉は、あなたにとっては「精神的」本質を意味しておりますね。——悪を善に、苦しみを悦びに変化させ、——存在しない神的な「調和」を実現するように努めることが私たちの義務です。それはこの宇宙にはないものです。それは浄化された私たちの「願望」、それを在れかしと思う私たちの意志の中にしかありません。それは激しい不協和音をもった偉大な交響曲の永遠の大波の中の一つの経過和音にすぎないかも知れません。しかしその和音は、私にとっては、神聖なものの頂点、暗い大洋の濤の波頭の上に一瞬間止まる天上の微光です。

大洋神におけるあなたの友

ロマン・ロラン

ジャック・メニルに

1921年1月13日、金曜日

私はたいへんな当惑の中にいます。約束した序文を書くことがほぼ不可能だと感じています。ひじょうに大きな仕事をしたルネ・マルシャンに、どうしてそれをはつきりと、親切に説明すればよいかわかりません。

私は——原稿全部ではありませんが——数章だけを（初めの方、科学と芸術に関する章を、同時に）読みました。なぜかという、私の視力はたいへん疲れているし、それにこの書体がしばしばひどくへたです…

言わざるをえないのですが、私は仰天しました。一方では、一つの過去に、私にとっては死んで、時代おくれになってしまった過去に後戻りするという耐えがたい感じをもらいました。

他方では、12年いらいはじめて、トルストイの弟子が不手際な鏡の中に、トルストイのあらゆる欠点を非難するのを見て、狭い、不当な、野蛮で無知な者が道徳を説く悪趣味をみて、堪えがたい印象をうけました…

それは言うのも怖ろしいことです！しかし私は嘘を言うことはできません

神！あの偉大なトルストイ——彼がそうありたいと思った、また彼が実際にそうであったことに関して、トルストイが自身に対してなした道徳至上主義的（それは平凡な実利的なものでしたが）無意識の嘘に関して、いったいどんな本を書くべきだったのでしょうか？

忍耐力に関するトルストイの^{カテシスム}教理問答よりも、彼の自発的な「対話」（それから、もちろん、彼の芸術作品）を彼の忍耐力の教理問答よりもどれだけ多く私が尊重しているかということをおあなたに申しました。真の「善」真の、健全な、強い「道徳性」という見地からさえも…

しかし、少くとも、彼がものを書く時には、彼のお説教のなかにおいてすら、この偉人はその鼻——どんな（獲物の）足跡もトルストイの大きな鼻にかかっては叶はないのですが——の先を示します——そして彼のユーモアは彼の最悪の不正をも見逃してしまいます。

ところが巨匠の言葉を拾い上げる、信心に凝り固まったトルストイ主義者たちとなると、いやはや！それは容易ではありません。まるで教理問答の礼拝堂にいるような感じです。

いいえ、クレマン・ヴォーテル^{*}のような人がおそらく説いたであろうように、芸術や科学を社会の実用にまで引き下げようと本気で考えるのを聞いては我慢できま

* フランスのジャーナリスト 1876～1954

せん。精神のもっとも深い宗教的源泉に対する何という（宗教の名において）無理解でしょう——芸術創造、科学的直観——内面的な歓喜に対して！

しかも、誰よりもよくそれらのことを知っていたトルストイなのに、この教化的な論文でみると、彼はそれを全く知らないかのように見えます！

そのような批評は、一種の精神分析的批判を誘うことになるかも知れません。それはなかなか興味のあるものですが、しかし（私が心配するのは）（トルストイに対する）尊敬の念がひじょうに欠けているという点です——ソフォクレス、アイスキュロス、ダンテ、シェイクスピア等人類の天才を讃える論文の中で、彼らに対する敬意が欠けていたのと同様です。

……中略……

私はこの本を読んで、なお一つ別の印象を受けました。私は民衆の読者に彼がどんな印象をあたえるかということを想像しました。利害関係を離れた無私な知性に対して、無知なプロレタリアが抱く憎しみを余りにも煽り立てるに過ぎないと私は思います。（奇妙なことに、芸術または科学における私利を離れた一つの仕事や研究に対する理解はトルストイにとっては無関係で、反感を与えるように思われます！——しかし彼は自分自身をだまそうと欲します。彼はそれが反対であることをよく知っています！）

私はインドの本を1冊読み終えたところです。ああ！偉大なバラモン教の思想の中ではなんと呼吸がらくにできることでしょう！凡てのために、芸術のために、科学のために、それから人間の愛のために、なんと余地があることでしょう！それと同様です、「戦争と平和」においても。私はトルストイの偉大なこの本を、彼の凡ての信仰の手引書よりもはるかに宗教的だと思います。……以下略……

ロマン・ロラン

《Du holde Kunst in wie viel granden Stunden》…

(優しい芸術よ、おんみは何と多くの灰色の時間の中で……)

細川 廣一

《オリヴィエは諦めたように溜息をついてピアノの前に行って腰をかけた。そして彼を親友として選んだ威圧的な友クリストフの意志へ従順にしたがって弾きはじめた。そんなふうに彼がしばらく躊躇したのち弾いたのはモーツアルトの美しい「ロ短調のアダージョ」であった。初めのうちは指がふるえて、鍵盤を压するだけの力が出なかった。それからやがて少しずつ、オリヴィエは勇気を取りもどした。そしてモーツアルトの魂のこぼれを自分はただ復習しているのだとオリヴィエ自身思い込んでいながらも、知らず識らずのうちに彼は自分の心情を示していた。音楽は無遠慮な告白者である。音楽は、心の中に奥深く秘めている思いもさらけ出す。モーツアルトの「アダージョ」の神々しい輪郭の奥にクリストフが見出したのは、今それをそこで弾いている未知の友の、いろいろな秘めやかな特徴なのであって、モーツアルトその人の特徴なのではなかった。クリストフは、この神経質な、純粹な、愛情ぶかくて内気な人間オリヴィエの愁わしげな静澄さ、はにかみがらな優しい微笑を見出した。しかしその楽曲を最後まで弾き進んでいって、その最高潮の個所で惱しい恋ごころの楽句が高まってはくずれ落ちるところまでくると、オリヴィエはもうどうにも乗り超えられないはにかみにさえぎられて、弾きつづけることができなくなった。皆が黙り込んでしまい、心の声がつかえたのだった。両手はピアノからはなれて下り、そして彼は言った――。

「これ以上は弾けません……」

オリヴィエのうしろに立っていたクリストフは、身をかがめて、両腕でオリヴィエを抱くような恰好で、とぎれた楽句をピアノで弾きおえた。そして言った。――

「さあこれであなたの魂の音楽が私に解りました」

彼はオリヴィエの両手をとった。そして永いあいだまともに顔を見つめた。ついに彼は言った。

「何て奇妙なことだろう！……私はすでに以前にあなたに会ったことがある……。私はあなたをよく識っている、ずいぶん前から識っている！」

オリヴィエのくちびるがふるえた。もう少しで言おうとした。しかし彼は黙っていた。

更に一瞬間クリストフは彼を見つめた。それから無言のうちに微笑した。そして立ち去った。》

(ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』7, 「家の中」より, 片山敏彦訳みすず書房版)

波多野茂弥さんの朗読はさらにつづく――。

《生が過ぎ去る。肉体と魂とは一つの潮のように流れて行く。歳月は老いる樹林の肉の上に書き記される。有形の全部の世界は使い古されて再び革まる。おんみだけは過ぎ去らない、不滅の『音楽』よ。おんみは内面の海である。おんみは深い魂である。おんみの明るい眸の中に、人生はその陰気な顔を映さない。おんみから遠いところで、雲たちの羊群のように、熱い、冷い、熱病じみた日々の列が不安にかられながら走り去り、それら日々は何ものによっても決して引きとめられることはない。おんみだけは過ぎ去らない。おんみは世界の外に居る、おんみはおんみだけで一つの世界である。おんみはおんみの太陽を持っており、その太陽が、おんみの遊星たちによる輪舞を、おんみの重力を、おんみの数理とおんみの諸法則とをつかさどる。おんみは星たちの平和であり、星たちは夜の空間の畠に彼らの光の畦を引く――それらの銀いろの鋤をみらびくのは、人の目に見えない牧者である。

音楽よ、清澄な、明るい友だらよ、地上現実の日光の鋭いきらめきに疲れた眼に、月光のようなおんみの光は優しく、こころよい。人々が飲むために、彼ら自身の足で踏んで水盤をにごらす、共同の井戸に顔をそむける魂はおんみの胸に身を押しつ

けて、おんみの乳房から夢の乳の流を吸う。音楽よ、処女であり母である音楽よ、その無垢の肉体にはあらゆる情熱が宿っており、氷河から流れてくる蒼ざめた緑の水みたいな色の、燈心草色の、おんみの眼のみずうみの中に、あらゆる善とあらゆる悪とがふくまれている。——おんみは悪を超えている。——おんみは善を超えている。おんみを住家とする者は世紀の経過の外に生きる。その者の日々の連続は、ただの一日にほかならないだろう。そしてすべてのものを噛みくたく『死』はその『一日』を噛み破ろうとすれば歯を折るだろう。

私の悲しみの心を揺ってくれる音楽よ、私の悲しみの心を、静かな、確固としたよろこばしいものにしてくれた音楽よ——私の愛、私の宝であるものよ——清らかなおんみの口に私は接吻する。蜂蜜の色のおんみの髪のかなかに私は顔を埋める。燃えて痛む私の頬を、おんみの両手のやわらかなたなごころの上当てる。私たちは沈黙する。私たちは眼をとじている。しかも私は見る——おんみの眼の、言いようもない光を。私は飲む——おんみの無言の口の微笑を。そして私は、おんみの心臓の上に身をかがめて、永遠の生の鼓動に聴き入る。》

(同 10, 「新しい日」より)

(中 略)

波多野さんの朗読をききながら、ぼくは、うんうんとうなずきながら、さらに熱いかたまりが吹き上げてきそうになるのが快かった。

「おんみは内面の海である」、このときぼくは音楽をしているときと同じ質の心の充実と解放を感じた。それは豊かな心の海の出現であり、すべてのものがいとおいしく、美しくきらめいているこの瞬間には自分の生命を自分でみつめられるのだ。なんと愛すべきものなのか。生きるというのはなんとすばらしいことなのか。

そのあと、ベートーベンのソナタ OP 106 のⅢ楽章をきく。ロマン・ロランが、マルヴィエダとの心の対話をこの曲でしたという。「音楽で語ったあとになにを語ることがあろうか。」ひとつひとつの音が、心の水面をゆり動かし、ことばならひ

とつのイメージにしか表わせないことを、そのまわりにあるものすべてを一瞬にして音楽は語っていく……。ベートーベンは気のすむまで内面を探究しつくし、この長大な楽章はおわる。まさにこれは即興演奏の世界だ、と林さんたちと話す。

展望台で星をみながらも、この感動は続いていた。たくさんの仲間たちが帰ったあと、波多野さんと話しつつけた。「宇宙の神秘さと同様に人間の内面の神秘さもまた不思議なものでねえ……。」人間というのはまったく不思議な存在だ。宇宙の神秘さを認識できるのだから。しかし、ぼくは、そこに在る宇宙というもの、それを認知しているぼくという生命体との関係に思いがめぐってくると、突然大きな不安ともいえる衝動といっしょに目まいを感じる。どうしてもその先が感じられない。わからない。次元の限界だからか？

こういう不安やおののきから救ってくれるのも音楽だ。バッハの平均律クラヴィア曲集！これを聴いていると、ぼくは宇宙の創造者に会った気持ちかして心が平和になってくる。このなかではおもいきり生命の来し方をおもい、ゆく先が考えられる……。

(中略)

いつの頃からかシューベルトの『an die Musik (楽に寄す)』のメロディーが、こういうときに必ずおもいきり起こされてくる。「すべてがいと美しく——」そしてそういう心を生み出してくれる音楽に心から感謝したい。そういう想いにあふれるとき、このシューベルトの曲はまさにそのものである。昨年、群馬では宿舎で村田さんがうたいだし、ぼくがピアノを弾いた。そのあとでそこにいた人たちほとんどがひとりずつ「自分のうた」をうたい、それぞれが最高の自分を出した。心はやわらかく、暖かく、いとおしかった……。

いまこの原稿を書こうと思ってひらいた「ジャン・クリストフ」の「新しい日」の序文の前にロマン・ロランは4小節のメロディーを書いていた。はじめ、それはロラン自身の作曲かなと思ってながめていたけれど(原文はタテ書きになっていたのですぐにピンとこなかった)、よくみると——Du holde Kunst……とあるではないか。

シューベルト!!

ああ、ロランもまたこれを想っていたのだ。

(後略)

<深い出会い>への望み

私にとっての『ジャン・クリストフ』

下村 肇

あなたの愛読書は何ですか、と問われれば、私はほとんど反射的に『ジャン・クリストフ』あるいは『魅せられたる魂』だと答えるだろう。しかし答えたあとで、ちよつと待てよ、と私は考える。はたして今の私に『クリストフ』が「愛読書」だなんて言える資格があるのだろうか？

愛読書とは、それを読んでただ単によかったとか感動したとかいう本だとするなら、私はたいへん不満だ。「愛読書」という言葉をそんなふうには使いたくない。その人の人生に何か決定的なものを与え、その人の生涯の終わりまでその人の生き方の道標となっているような本に、私は「愛読書」という言葉を使いたい。だから、まだ大学一年の若僧の私が『クリストフ』を（あるいは『魅せられたる魂』を）「愛読書」だなんて言うのは早すぎると思う。『クリストフ』が私の「愛読書」となるか否かは、私自身のこれからの生き方それ自体にかかっているような気がしてならないからである。

* * * *

中学生だった私のはじめて『ジャン・クリストフ』を読んだとき、いちばん心をゆさぶられたのは、クリストフの死生観と芸術観であった。人生とは死と復活の一連続であるという考えと、芸術とは真実を求めるものであり人に生命力を与えるものであるという考え。いずれも、『クリストフ』の各登場人物のすばらしさ以上に私の心をゆさぶったし、いまもゆさぶり続けていると言えるだろう。

ところが、最近ある人から、「人生は三つの座標軸で決定されるってよく言うんですよ。つまり、場所と時間、そして<相手>という座標軸なんです。」という話を聞いたのがきっかけで、今までとは少しちがった点から『クリストフ』をながめ

でした。すなわち、クリストフの人生が〈出会い〉の連続であり、彼はその〈出会い〉を誠実にうけとることによって、確実に成長していった人だという点だ。

ここで私の言う〈出会い〉とは、人と人とが顔見知りになるとか、何かをともにするとかを言うのではない。ひとつ屋根の下でくらしている親子や兄弟といった肉親関係の間になって〈出会い〉が成立しないことだってありうるし、漱石の『坑夫』の中の主人公と安さんのように、それまでまったく見ず知らずだった人が〈深く出会う〉ことだってありうる。つまり人と人とが真実の対話をし、〈あなたと私〉という関係で両者の魂が互いの個性を尊重しつつ、触れあい、理解しあい、高めあうときこそ、そこに〈出会い〉が成立していると私は言いたい。

ある夏の夕方、クリストフはグラチアに数年ぶりかで会う。オリピエの死、アンナとの愛欲の二つの大きな試練を通りぬけてきたクリストフと、数か月前に夫を失ったばかりのグラチア。「あなたは苦しんだのですね」「あなたも」——この短い対話だけで、二人はそれまでの互いの苦しみを理解しあう。それ以後、グラチアが死ぬまで続く二人の交友。クリストフがイタリアを訪れる場面、グラチアがパリのクリストフの家をたずねる場面、アルプス山中で二人してリオネロを看病する場面など、いずれも〈深い出会い〉にほかならないと私は思う。

そしてグラチアに限らず、クリストフの生涯は〈出会い〉の連続だった。ルイザ、ゴットフリート、ザビーネ、シュルツ、オリピエ、フランソワーズ、……彼らと〈出会い〉、そして離別するたびに、クリストフは死を超越した、より強じんな生命力を獲得していく。今の私にとって、『クリストフ』の魅力はまさにここにある。

私たちの生きている現代社会は、ロランの生きた時代とあまり変わっていない。芸術の腐敗と戦争の危機とを含んだ「広場の市」なんじゃないかと思う。そしてさらに悪いことに、そこに「複合汚染」なるものが混入してきて、ロランの生きた時代以上に困難な時代だ。そんな時代にあって、「よりいっそう偉大でよりいっそう幸福である」のは、らくだが針の穴を通るよりもむずかしい。しかし、だからといって、私にとって幸福というものが、「天国」だとか「浄土」だとかいった何かあらゆるの側にあるものではないような気がする。クリストフのように、その時代をせいいっぱいに生きていき、〈人と深く出会う〉たびに力を獲得していく過程に、幸

福とよべるものがあるんじゃないのかな。

* * * *

私のこれからの人生において、私は私のゴットフリートや私のオリビエや私のグラチアに会うだろう。限られた人生のことだから、出会う人の数には制限があるかもしれない。だが、その限られた数の人との〈出会いの深さ〉には無限の可能性がひそんでいる。クリストフのオリビエやグラチアとの〈出会い〉があんなにも深かったように。そしてその〈出会い〉のたびに、私がいささかでも成長していき、ユニテへのささやかな努力をおこたらなかったとすれば、そのときはじめて、『ジャン・クリストフ』は私の「愛読書」なんです、と今よりももう少し自信をもって言うことができると思う。



「ロマン・ロランと私」

田中伸枝

卒業論文のテーマとして、ロランの「ジャン・クリストフ」とりくんだ私にとって、この1年は、常になんらかの形で、ロランを意識してきた1年だったと言えます。今春学生生活を終え、社会人となるにあたり、今の時点での整理の意味で、ロランが自分にとって、何であったのか、また何であるのか自問してみようと思います。

ロランと私の出会いは高校1年の時に「ジャン・クリストフ」を読んだのが最初でした。暑い夏の日に、自分と同年代のクリストフが描かれている「若者」や「反逆」を必死で読んだことを覚えています。あの頃は、早く自分の人生の指針のようなものを見つたくそんな私にとって15歳のクリストフが聞く、彼の〈神〉の声、「行け、そして死ぬ！ 必ず死ぬ者らであるおまえたらよ！ 行け、そして悩め！ 必ず悩まねばならないおまえたらよ！ 生きているのは幸福であるがためではない。生きているのは、わたしの《法》^{のり}を成就するがためだ。悩め。死ぬ。しかしおまえがあらねばならぬその者であれ。ひとりの《人間》であれ。」は、私にとっても強いショックでした。りっぱな人格者になれ、とか、道徳的なことにふれているのもなさそうだ、「人間であれ」とはいったいどういうことなのか、と、何か自分にとって新しい視野が開けたような気がして考えこんだものです。また、私が読んだ版には、ロランの言葉を列挙したしおりが載っていてそのうちの、次の言葉も忘れられないものです。「人間であれ。何事にも囚われない、自由で、真実で、正しい人間であれ。そして、このような人間を1人のこらず尊敬し愛することだ。」このようにふりかえってみると、あの頃は、ロマン・ロランを身近に感じた、というよりも、彼が創造したジャン・クリストフ——そこから発散する底力のようなものに何かすがりつけるものを求めていたような気がします。

作品の向こう側にみえるロランという人格を本当に意識しだしたのは、やはり卒

論をつくっていく過程ででした。以前から、ロランの描く女性たち、その生きた女性描写にひかれていた私は、テーマを『ロランが描く女性像の特質』としたものの、どうやって手をつけたらいいのか、まったく暗中模索の状態でした。徐々に、ロランのもつ多様性や、独特の思考もみえてきて、これはたいへんな作家をテーマにえらんでしまったと、ただあせりをおぼえるばかりで、幾度、逃げだしてしまいたい、と思ったかわかりません。その時、究極的に私を励まし救いとなったのは「ジャン・クリストフ」をはじめとするロランの作品自体でした。ゴットフリートやアントワネットは、とても小説の中の人物とは思えず、何度、その声ではげされたことか。先日、新聞の文芸批評の欄に「失意のなかの光芒」という言葉があったのですが、ロランの描く人物は、失意であればあるほど身近に感じられるような、そして、彼らが失意のなかにあっても決してあきらめてしまわず、マイナスの不幸からプラスの不幸へ転化していくことによって、自らをひとつの光としていくような不思議な魅力にあふれていると思います。例えばフランツとの恋愛に傷つきながら、「すべての献身は裏切られます。…わたしもやっぱり裏切られました。でもわたしはまたやりたいと思いますわ。」というアンネットのように。片山敏彦氏が「ロランの芸術作品は、つねに真実な悲劇感をともないながら、人々の魂をはげます。『悲しみを通じての歓び』の感銘を、ロランは小説作品によって読者の心の底まで深く浸透させるがその感銘は、世界文学の中でも、めずらしく独自の、うつくしい純粹さであり、この点でベートーヴェンの音楽ともっとも同質的である。」と述べておられますが、このことを卒論を通して自分のものとして体験できたように思います。

このように得たものも大きかったわけですが、まだ得ていないもの——ロランの中の、まだ理解できていない部分——も数多くあると思います。先に少しふれたように、私の卒論のテーマは『ロランが描く女性像の特質——「ジャン・クリストフ」の女性たちを中心に』ということでした。私が見きわめたかったのは、ロランが追求しようとした女性像とはどのようなものだったのか、その中で変わらず生き続ける要素、*éternel*な要素はどういうものなのか、ということであり、それは、彼女たちが自己の内なる声に忠実に従い、周囲の偏見や常識的な掟に対決していく勇氣をもちながらも、あくまでも「限りなく女性的なるもの」でありつつける姿に強

い共感をおぼえたことに裏づけされていました。いろいろ見ていく過程で、単に、ロランと女性、という以外に、高校時代には、気のつかなかった点、例えば、理性よりも心情の偉大さや愛を、作品の中の思想よりもその作品に流れている魂（内的な生命）を重視する、といったロランの視点に新たにひかれもしました。しかし時間的なことや力量不足でたくさんをそのままにしていることも確かです。たとえば、ロランのいう「神」の問題、「エロス」という概念のこと、そして、ロランの中の女性を考える上で「魅せられたる魂」をとりあげていないこと自体、まだまだ道は遠いなあ、という気がします。

これからは学生時代のように自由に時間もとれないでしょうが、いろんな事柄をロランとともに、ただ感動をうわべだけにとどめるのではなく、どこまで深く考えることができるか、みつめていきたいと思います。「クリストフの顔をみているかぎり」ロランの精神によって守られている、そんな確信がわいてくる、今の私です。



ロマン・ロランと音楽

ジョルジュ・オーリック

はなはだ由々しく且つもつともな多くの理由が、私たちの最良の友さえも、日毎、ますます深く分裂させているとき、どのようにしたら、以前と変らぬこだわりのない気持で、そのものたちみんなともう一度まみえることができるか——時ととき、私たちはそうあることを願っているのだ——を知ることは、かなり奇蹟的な喜びであり安らぎである。それは、なんらかのとがむべき柔弱さ、つまり気ままなディレクタントィスムに身をまかせることではなくて、各人ひとりひとりが、自由に席を占めるのに十分なほど広大なひとつの領域を、『音楽への愛』が、私たちに切り開くということである。

そういうことであれば、ロマン・ロランについて語り易くなるはずであろう。彼の心ほど、私たちの芸術にたいしてときめいた心は、ほとんどなかったであろうから。彼が70才を迎えた今、作家ロランが、溢れるばかりの雄弁さで、——その雄弁さは、彼の作品の愛読者たちの心を捉えて引き込んでいったが——彼の親愛なる偉人たちのうえに、彼ら偉人たちの諸作品のうえに投げかけた多くの熱狂と興奮とを思い起こすだけで、私たちの心は感動させられるのである。．．．もつとも高邁な精神、それこそは彼が努めて敬意を表してきたものであると同時に、情熱をこめて彼が私たちに提示してきたものである。《いや、芸術と人生はシャボン玉遊びではない!》と、非常に強く彼は言った。それ故、彼は、私たちにひとりのベートーヴェンを指し示し——、彼ベートーヴェンが、比類なき闘いのなかで、もろ手をひろげ、どのようにして世界をとらえることができたかを、私たちに教示したのである。この精神の英雄の勝利、これこそ、考えられうる文学的技巧を、あたるかぎり排したその文章のなかで、彼ロランが敬意を表したところのものである。というのは、ただに諸々の正当な戦い、つまり私たちの痛ましくも血みどろの争いとは遠くかけはなれて、純粹に知的な空間のなかで解決されるような、まさにそんな戦いはどこで交えられ

るのかということ、ロマン・ロランはすでに知っていたからである。彼が実例として私たちに提示した英雄たちをなかだちとして、私たちが、あるひとつのよりすぐれた自己認識に到達すること、そのような偉大な諸作品に私たちの魂を近づけることによって、魂を赫々たる火の前に照らし出すこと。．．．音楽に熱中する幾多の心が、そんなにも高邁な熱意をこめて自分たちを高揚させているその声を、耳にしてきたのである。

今のいまこそ、私は、自分がある必然の告白をしいられているのを感じている。しかしながら、このような人〔ロランのこと〕について語る場合、礼節のうえからあることを言わないでおくなどということは出来ない相談ではないだろうか？ 彼はそんな礼節上の配慮を、ちっとも必要とはしていないし、私の方でも、できれば反対に、全く真率でありたいと思っている。それだからこそ私は、非常に率直に次のように言おう、私にロマン・ロランを好きにならせているところのもの、それは、もっともよく知られている彼の文章の幾ページかの中に奔出している格調高いリリシズムではないのだ、と。思うに、今日私が言いうことは、いかなるふうにも見誤ることなく、ひとりのベートーヴェンなる天才を賛嘆しているということである。私が私たちの^{ノートル}楽聖たちを評価づけする際、私は、彼ベートーヴェンを、彼のしかるべき位置、特別席にすえるように思われるが、そこにあつて、彼は神々しいばかりの輝きを放って輝いているのだ。しかしながら、彼ベートーヴェンの作品を解釈するにあつて、ロマン・ロランの迸り出る情熱は、私には無用のように思われる。それは多分、私の音楽性の脆弱さなのであろう。いくつもの形容詞が、あるひとつの主題、あるいはあるひとつの^{モジュール}転調に呼応しているとき、私は、それらの形容詞に、非常な恐怖を感じる。そして、ある奏鳴曲の、またはある四重奏曲の至高の美しさを十全に味わい楽しむために、なにはおいても、まず私が試みることは、純粹に語りかけてくる音の流れ（le pur discours sonore）にのみ、耳を傾けるようにすることである。この音の流れには、メロディーと、ハーモニーと、リズムとの、絢爛たる、かつ驚嘆するような継起がともなうが、これらの三要素は、私たちの限りある不毛な世界をすこしも必要とはしない、ひとりの創造者の天才のみによって、結びつけられている。

思うに、ロマン・ロランの諸註解は、光〔^{リュミエール}解明〕を渴望している多くの聴衆のために、幾人かの傑出した音楽家たちの精神の騎行を、いっそう力強く照らし出して〔解明して〕みせたのである。がしかし、私がこれらの音楽家たちを賛嘆していたのは、それとは逆の理由によるのである。つまり、日常生活において、一步あゆむたびごとに私を脅かす諸々の言葉や概念の、遙か彼方に私を連れて行ってくれるのが、彼ら音楽家たちだったからである。そのことこそが、私にとって、「音楽」の真の奇蹟だったのである。と言うのも、いかなる芸術も、音楽ほどには、私たちが人間であるということの重苦しさから私たちを解き放ち、身軽にしてくれなかったからである。ある偉大な作品の演奏会で、多くの不安にみちた魂たちが探し求めているものは、そうしたものではない、ということを知っているし、私以外の人びとが、そうした魂たちに、友愛の鏡をさし出すということも、私は理解している。友愛の鏡は、その作品のなかにおいて、彼ら魂たちが脱け出すことができないでいる諸々の苦痛や、情念や、苦悩を、至高の靈感によって、昇華し、偉大化した姿で、彼らに呈示するであろう。それこそが、数多の文章における、仲介者としてのロマン・ロランの立派な役割であつたし、またその役割が、彼の読者の信頼を、いはばやく彼にもたらしたのであろう。打ち明けて言えば、1936年現在、もっとも静謐な教訓を私たちに教えているひとりの人間に、私は、全く別なふうに近いのであつたのである。ひとつの魂の美しさは、究極のところ、ありとあらゆる妨害抵抗に打ち勝つものである。憎しみも、侮りも、愚かさも、ヴィルヌーヴの孤独者〔訳註、ロマン・ロランのこと〕が、多くの人びとに対してと同じように、私に対しても示す亀鑑に対して、何もなすことはできないのである。かつて私が、いくつかの文章のなかで、——私はそこに、文学者をしか求めてはいなかった——いささか苛立ちを感じながら読んだその同じ言葉が、今日、ただちに私の心に通じてくるのである。なぜなら、彼以上の信念と忠誠とをもってその言葉を口に出すことは、不可能だからである。しかしこのことは音楽とは何の関係もないことである。私は、この驚くべき人の附した、もっとも熱烈な評釈のいくつかに、自分が心をとざしていたことを感じて後悔している。私は、できることなら、彼をもっと称賛したかったのである。ある宗教のなかに生きるがごとく、自分たちの芸術のなかに生きる『ジ

『ジャン・クリストフ』の主人公たちが照射する、慰めにみられた力強い光に対して、私が無感覚であったことは一度もない。そして、この幾巻もの悲壮な書物をひもとく多くの読者にとって、その主人公たちがなんであったのかということ、私は知っている。まったく彼らは、芸術をもって、おのが人生の実質そのものとした、芸術の使徒たらだったのである。

さて、音楽学者ロマン・ロランの仕事の、きわめて重要ないくつかの点をはっきりと述べておくことは、肝要なことである。『リュリおよびスカラッチィ以前のヨーロッパにおけるオペラの歴史』、『ありし日の音楽家たち』についての諸研究（私はこの方が、『今日の音楽家たち』にささげられた本よりも好きである）、『ヘンデル』、『過去の国への音楽の旅』は、芸術家ならだれであれ、知っておかねばならない重要な研究論文であり、その考証と研究資料の扱いにおいて、まったくすばらしい正確さと権威とをもって書かれている。このような数々の研究論文は、かつてその声を聞いたことを、私の喜びとも誇りとも思っている先生に、今日、全面的に真摯な賛辞を贈るまっつき権利をもつため、私になそうと思っていた、また、なすつもりであった幾つもの留保を免れているのである。

（三木原 浩、田中敏彦 訳）

〔編集部注〕

上記は、ジョルジュ・オーリックが、1936年2月1日付の『ヌーヴェル・クリティック』誌上に発表した論説の翻訳である。なおジョルジュ・オーリック（Georges Auric, 1899～）は、フランスの作曲家であり、ロランの戯曲、『七月十四日』が上演された際（1936年）、オネゲルらとともに、この戯曲に附す音楽を作曲している。

森 藤 寛 二

私が初めてロマン・ロランを知ってから、もう10年になります。ロランの数々の著作は、私の青春時代の感動的な邂逅の一つ一つであったし、そこから無限の力と希望をくみ出すことのできた人生の恩師、精神的支柱であったといっても決して過言ではないと思います。

一番最初に彼の名前を知ったのは、中学3年の時の国語の教科書に「ジャン・クリストフ」から、クリストフとゴットフリート伯父とのあの印象的な場面が引用されていて、ベートーヴェンをモデルに書かれた小説だと教わった時だと記憶しています。その時は、ロランの名前も忘れてしまっていたのですが、高校2年の頃、誰もが経験するように私も人生の様々な疑問や悩みを抱くようになっていました。そしてその解決を求めてむさぼるように文学、哲学を読みあさりました。「寂しい時は、寂しがるのがいい。運命がお前を育てているのだよ。」という親鸞の言葉に出会ったのもその頃です。この倉田百三の「出家とその弟子」の解説で、「これは東洋の仏教精神とキリスト教との素晴らしい調和を示す作品である。」といった意味のことを書いている人が、ロマン・ロランという人だったのです。以来「ジャン・クリストフ」を読み直し、ページをめくるのがおもしろいような気持ちで読みふけた当時のことは、今でもはっきりと覚えています。「ジャン・クリストフ」は感動の一語に尽きます。今以上に人生の様々な事柄に無知だった当時の私は、まるで新鮮な輝きの下でそれらを眺め、この雄々しくも悲劇的な一大交響詩を感激をもって読み続けました。それからは何度かくり返して「ジャン・クリストフ」を読むと同時に、ロランの様々な分野の書物を読むのが私にとっては最大の楽しみの一つとなっています。よくロマン・ロランは青春の作家だと言われます。確かにあのような感激は青春時代にしか味わえないものなのかもしれませんが、私はこれから先も、生涯、及ばずながら会員の皆様と共にロランの足跡をたどって行きたいと希望するものです。

辻村由美子

△月△日。——多くの人々は自分の考えを自ら知らないままで生きるという便利な生活法を採用している。……しかしクリストフは万事につけて顧慮を感じる厄介な誠実さの要求に悩まされていた。それで彼は意識しはじめるとそれ以後は常にその事を考えずにはいられなかった。——自分だけが考えめぐらし苦しんでいるのではない。クリストフもそうではないか。今まで考えてきた事は無駄ではなかったのだ。結論を急いでもなにも得られない、それなら一生涯休まずしつこく追及してみよう。人間の一生なんてものは苦難を克服し安らぎが得られる時がいつかやって来てそれから楽になる、そんなものではないのだ。常に克服しつづけ、のり越えつづけなければ。へたばりはしない！

△月△日。クリストフの精神的発達のプロセスは意義があるがそれ以上に感銘を与えるのはゴットフリートだ。彼の言葉によってクリストフも私も救われるのだ。——明けて来る新しい日に対して敬虔な心をお持ち！1年のち、10年のちにどうなっているかを考えることはやめるがいい。理屈はみんな、まず差し置いてしまうがいい。いいかい、みんなだよ。美德のことを論じる理屈さえもみんな良くないよ。ばかっているよ。今日を生きることだよ。……人間は自分にできるだけのことをしなければならぬのだ。……*Als ich kann*……英雄ってのはつまり、自分のできることをする人のことだろう。——ここを読んでクリストフと一緒に叫んでしまった。「そうだ、とにかく、これだけで充分だ。今日をせいっぱい生きるのだ。」と。

これは私が「ジャン・クリストフ」を読み始めた時の日記の断章ですが、このようにこの本は第1巻からして私をロマン・ロランのとりこにしてしまったのです。それから私は貪るように「ジャン・クリストフ」から「魅せられたる魂」へと読み進んだのです。彼の持つヒューマニティや人生に対する誠実な態度、積極性そして愛

及び生の哲学は乾いた砂に水がしみ込むように胸の奥底に入り、心の渇きに苦しんでいる私をいやしてくれたのでした。そして今、彼はともすればくじけそうになったり、苦しみを避け安易な道を選ぼうとしてしまう私の心をふるい起こし、励ましてくれるのです。彼の言葉の一つ一つが私には啓示なのです。ロマン・ロランと出会った事によって私の人生に対する、又、他者に対する、この世のすべてのものに対する態度は変わりました。もう一度手ごたえのある人生を求め、苦悩のつづてを拾いながら誠実に生き直してみようと、そして多少なりとも彼に近づくべく魂の英雄である彼の精神を追及し自分に生かそうと思うようになりました。その事は私の精神の糧であり、又、ライフワークにもなるべきものなのです。偉大な彼をらっぽげな私がどの程度理解できるものかわかりませんが、しかしこうして私は心の葛藤を繰り返しながら魂の自由と精神の独立を求めて、真実の人生を追い求めロマン・ロランに励まされつつ彼と共に模索生きていくことになるでしょう。

＊

武本英之

(前略) . . . ジャン・クリストフは、少し前かがみの姿勢でものうげな表情を浮かべながら私の眼前に現われるやいなや、私の生活の一部分を形成しはじめた。それは、今から2年程前になるだろうか。大河のリズムと自然の濃緑を今でも想起することができる。暗さへの明るさの勝利、物質への精神の勝利、 . . . モチーフはこのような言葉によって要約されるにちがいない。能動性への活路を指し示すと同時に、弛緩への怒りを内包する《力の結晶》は、人間への根源的な何物かに影響を与えずにはおかない。そして、時の超越という観点からするならば、〔『ジャン・クリストフ』は〕聖書の存在に等しい地位を勝ち得ることに成功している。—ロランの生涯の希求である民衆のための行為。《敵に精神的な武器で立ち向かうのではなく、敵を残忍な実力行使によって打ち負かすという可能性によって、ヨーロッ

バの生命、いな世界の生命は、関心と真の価値とにおいて無限の喪失をまねいた。ボルシェヴィズムとナチズムが現われるにいたって、中世の騎士道的な伝統は全面的かつ決定的に失われたのである。》(フルトヴェングラー)。。。この中にあって、ロランはジャン・クリストフ的な生き方を貫いたのであった。これほど自己に忠実な人間、そしてその人間性を全的に開花させうる、させえた人間は、今日では考えられぬ程稀である。。。かつてロシア人亡命者が日本人内村氏との対話で、人類の道程を「らせん状」という表現で形容していたのを記憶にとどめている。。。しかしながら現今の世界は、生活の認識的努力をつづけるにあたり、「らせん状の進歩的道程」に激しく反駁しようとする。これは自己の微力ゆえにか？ 時代のあまりの凡庸さゆえにか？

〔編集部より〕 文中(。。。)部分は、原稿より省略させていただいた部分です。



ロマン・ロラン研究所の近況

1971年4月に、ロマン・ロラン研究所が財団法人として認可、設立されてよりかぞえまして、今年1976年3月で、ちょうど5年たちました。ささやかながらも、多くの人の地味な努力のもと、着実に活動をつづけております。

さて、当ロマン・ロラン研究所発足時には故片山敏彦先生の、ロマン・ロラン関係の貴重な文献を多数御寄託いただきましたが、また昨夏（1975年夏）には、新村猛先生より、やはりロラン関係の貴重な文献を、数十点御寄託いただきました。これらの文献は、それぞれ、「片山文庫」、「新村文庫」として一括し、当研究所の書庫に大切に保全されております。片山先生の御遺族の方、並びに新村先生の御好意に、厚く御礼申し上げます。

ところで、昨夏7月～9月上旬にかけて、ロマン・ロラン研究所のロマン・ロラン関係の全洋書（約800点）の整備を行いました。酷暑のなか、蔵書をカードにタイプで打ち込むという作業、ならびに、整備にともなうさまざまな面倒な仕事に、心よく尽力くださいました、相浦玲子さん、阿部邦子さん、浦谷順子さん、熊谷ゆかりさん、藤田智子さんには、もう一度ここで御礼申し上げます。これらの文献図書カードは、1976年3月現在、相浦玲子さんの御好意により、書誌にまとめられつつあります。やがて近い日、ロマン・ロラン研究所におけるロラン関係の文献リストが、皆様のお目にとまることと存じます。

また、1976年3月18日から21日にかけて、当研究所理事長であられる宮本正清先生は、マリー・ロラン夫人の招きにより渡仏、Colloque international Romain Rolland à Neversに参加されました。この国際シンポジウムには、日本からの宮本先生以外に、フランス、イタリー、ソ連、ユゴスラヴィア、アメリカ、ドイツ、からも多数参加して、活潑な討論がおこなわれました。宮本先生は、席上、日本における、①ロマン・ロラン友の会、創立の経緯など、②ロマン・ロラン全集の翻訳刊行、③ロマン・ロラン研究所の活動状況、および研究所施設のスライド。。。等々について報告され、多大の感銘を与えられました。な

お、このシンポジウムにおける、宮本先生のご報告の、いままこし詳しい内容と意義につきましては、宮本先生より原稿をいただき、次号「ユニテ」（第5号）に掲載する予定です。

最後に、1973年秋より、波多野茂弥先生を中心に、ほぼ8名のメンバーで読みすすめておりました、ロランの短編小説「ピエールとリュース」は、1975年7月26日に、感動をもって、読み終わりました。作品のもつ美しい詩情や、主人公たちの直面する生と死との深い意味などを、真剣に、共に感じ共に味わいながら読んだ2年間の中に、すぐれた文学を「ほんとうに読むということはどういうことなのか」への、具体的な解答を見出しえたように思います。思えば、波多野先生を講師にこの原書講読が始まったのが1972年の秋でした。以来3年、はじめに「愛と死との戯れ」を、ついで「ピエールとリュース」の二作を読み上げることで、この度一応終了することになりましたが、それは単なる終了ではなく、いつの日か、新しいエネルギーをえて発展継承されていくための、一時休止と考えております。若い方たちの自発的な意欲に期待しています。

（編集部）



友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会の例会は、現在までに通算217回をかぞえています。その活動状況は下記の通りです。

1975年4月26日(土)

210回例会

第35回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ: 「ジャン・クリストフの中の音楽」

発表者 波多野 茂弥

出席者 25名

尚、この日は、『ジャン・クリストフ』第六巻「アントワネット」に出てくるグリュックの「オルフェ」のフリュート曲、ベートーヴェン作曲のスコットランド民謡「忠実なジョニー」および第七巻「家の中」でオリヴィエが弾くモーツァルトのロ短調のアダージョ(K 504)を聴く。

5月24日(土)

211回例会

第36回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ: 「魅せられたる魂」序文と、アンネットとシルヴィ 第一部

発表者 中村 佐多子

出席者 33名

6月28日(土)

212回例会

第37回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「魅せられたる魂」アンネットとシルヴィ 第二部

発表者 福島 光章

出席者 29名

9月27日(土)

213回例会

第38回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「魅せられたる魂」夏 第一部

発表者 岡田 淳平

出席者 25名

10月25日(土)

214回例会

第39回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「魅せられたる魂」夏 第二部

発表者 芹生 八郎

出席者 19名

11月22日(土)

215回例会

第40回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ：「魅せられたる魂」夏 第三部

発表者 山口修平

出席者 25名

1976年1月29日(木)

216回例会

第41回 ロマン・ロラン・セミナー

- テーマ： (1) ロマン・ロランの誕生日に特に思うこと。
(2) ロランの故郷のクラムシー及び、彼が晩年を過したヴェズレー等のスライド。

講師ならびに解説 宮本 正清

出席者 24名

2月28日(土)

217回例会

第42回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 「魅せられたる魂」母と子 第一部

発表者 名倉 美津子

出席者 17名



あ　と　が　き

やっと「ユニテ」第4号をおとどけできるようになりました。本来なら年2回発行のところではありますが、1975年度（昭和50年度）は、都合で遅れてしまいましたので、2回分を一冊にまとめて、第4号として発行いたします。第3号よりは原稿も多く、少しは充実したものになったのではないかと、ひそかに自負しております。読者諸氏のご叱正とお励ましを、お待ちしております。

南大路振一先生からは、「ユニテ」2号、3号、にひきつづきまして、『ロラン＝マルヴィーダの往復書簡』の翻訳をいただきました。毎号、この往復書簡の翻訳を読むことを心まらにしている読者もいるようです。完訳の際には、貴重なロラン文献ともなります故、5号以後の順次掲載もよろしくお願い申し上げます。

「ユニテ」2号に、宮本正清先生より、その一部分の原稿をいただきました『ロマン・ロランの母への手紙』は、このたび全訳が完成し、みすず書房より、近々、出版のはこびとなりました。そこでこの度は、新たに、目下翻訳を進めておられる『カイエ＝ロマン・ロラン17』より、その原稿の一部をいただくことにしました。ここに掲載された数通の手紙を一読しただけで、「書簡作家」としてのロランの別な一面を、深く追求してみる必要を感じます。

「《Du holde Kunst in wie viel granden Stunden》……」の筆者、細川廣一さんは、大阪音楽教育の会に属し、創造的な音楽教育について、共に考え、共に感じ、共に生きようと、熱心に活動しておられる方です。本来この一文は、1974年8月20日～22日にかけての同会の夏の合宿特別研究会（茨木の竜王山にて行われた）の記録によるものです。この合宿のテーマは《創造の精神》と名づけられ、同会のメンバー以外に、音楽家の林光氏や波多野茂弥氏も参加されました。波多野氏は、この合宿で、ロランのすぐれたふたつの作品、『ピエールとリュース』（小説）『愛と死との戯れ』（戯曲）を皆といっしょにたどりながら、《人物の生きざま、ロランの創作姿勢、思想》、さらには、《音楽》について語られました。細川さんのこの一文は、最初、月刊「入道雲」に掲載され、ついでこのたび、大阪音楽教育

の会刊行による『そのときうたは生まれる——音楽の授業2』（同姉妹編として、『子ども うた ぼくらの授業——音楽の授業1』があります。ともに、一つ橋書房刊、各1800円）に収録されたものを、筆者の御好意により転載させていただいたものです。ありがとうございました。

下村 肇さん（京大農学部在学中）は、中学生時代にすでに、ロランの『魅せられたる魂』を読み上げ、深く感動し、以来ロランの作品を折にふれてひもとく、すぐれた読者のひとりです。

田中伸枝さんは、大阪市立大学の仏文科でロランを卒論のテーマに選ばれた方ですが、このたび、『ロマン・ロランと私』という一文をお寄せくださいました。現在、大阪市立東中学校で英語を教えておられます。英仏両語を通してのヨーロッパ文化への接近のなかから、独自で、それでいて説得的なロラン像が生れることを願っています。

ジョルジュ・オーリック『ロマン・ロランと音楽』の翻訳紹介は、編集部三木原と、その友人の田中敏彦君（フランス文学専攻）との共訳によるものです。原文のフランス語が、かならずしも素直とはいえず、翻訳にはふたりとも悪戦苦闘しました。

ところで、今回の号より、ロマン・ロラン友の会会員の声の欄として、「ユニテの広場」をもうけました。尼崎の森藤寛二さん、大阪の辻村由美子さん、福岡の武本英之さんの投稿を掲載させていただきました。会員のみなさんには、どうかお気軽に、どんどん御投稿くださいますよう、お願いいたします。そして、このささやかな機関誌「ユニテ」を、文字通り、多くの人びとのユニテの場として、押し拡げてゆきたいと思います。

（編集部）

投 稿 歓 迎

○ ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ、枚数の制限はいたしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合上、何回かにわけたり、適当に削減することがありますので、ご承知下さい。

○ また、当然のことですが、原稿は必ず、四百字詰、または二百字詰の原稿用紙に横書きで書いて、ロマン・ロラン研究所あて、お送り下さい。

○ 締め切り日は特にもうけておりません。年二回の発行を原則としておりますので、適当な時にお送り下されば、適当に掲載いたします。

○ 原稿掲載者には、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」編集部

ユニテ 第3期 第4号

発行日 1976年3月31日

編集代表者 大橋 哲夫

発行所 ロマン・ロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL(075)771-3281

印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点電停前

ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時

場所 ロマン・ロラン研究所

会費 200円

講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所